柳原白蓮の戦後
――銃後の母から世界連邦運動へ――

井上洋子

戦後の白蓮は「世界連邦運動婦人部会」の担い手として婦人会の組織化に成功するが、その下地は愛息の戦死をきっかけに呼びかけた「悲母の会」に共鳴する全国の母たちの慟哭であった。白蓮の「執念ともいうべき」平和運動と、戦中の〈銃後の母〉との連続と断絶をたどってみたい。

■はじめに

私は、北九州市の若松で育ちました。若松は、伊藤伝右衛門経営の大正鉱業から掘り出された石炭の集積地であり、伊藤商店出張所を通して、上海、香港にまでその販路はつながっていました。中鶴炭鉱を主軸とする大正鉱業は、遠賀郡長津村（現・中間市）に位置し、堀川と鉄道を手段にして石炭輸送を飛躍的に伸ばしていきましたが、俳優の高倉健の出身地としても有名です。私が幼少の頃は、さすがに任侠映画のようなことはありませんでしたが、川筋気質という独特の人情に包まれた地域でした。

二〇一一年に、「西日本人物誌」の一冊として出版した『柳原白蓮』（西日本新聞社）では、あまり言及されてこなかった伝右衛門像と、近代日本における石炭産業の位置について書いたつもりです。華族令嬢であった白蓮は、本名を「燁子」といいますが、文明開化の象徴たる鹿鳴館の夜会の輝かしさにちなんで命名されました。華族が近代国家で担う役割が、王政復古であり文明開化だったとすれば、それと拮抗して富国強兵の役割を担ったのが石炭産業でした。そうした構造的枠組みがなければ、文化的なギャップを抱えた伝右衛門との婚姻は成立しません。飯塚の伊藤伝右衛門邸の二階には白蓮の書斎がありますが、そのすぐ横に白蓮のお嫁入り道具を納めた蔵が見えます。敷地内の他の蔵より一段と高く造られており、厳然たる身分社会のなかで、文化ギャップを抱えたまま挙行された結婚の矛盾が、そこに現れているようにも感じられます。

こうした矛盾が露呈したものが、大正十年（一九二一）の「白蓮事件」に他なりません。永畑道子さんの『恋の華・白蓮事件』（新評論、一九八二年）や林真理子さんの『白蓮れんれん』（中央公論社、一九九四年）もこぞって「白蓮事件」を中心に描いてきました。しかし白蓮の人生が事件で終了したわけではありません。

そのことに関連して、驚いた経験を申し上げますと、ＮＨＫの連続テレビ小説『花子とアン』（二〇一四年上半期）が反響を呼び、それに伴って、「うちに白蓮の色紙があるから見てください」というお問い合わせを日本各地からいただいたことです。そこに残されていた歌のほとんどが、昭和三十一年（一九五六）刊行の白蓮最後の歌集『地平線』所収の歌でした。皆様ご存知と思いますけれど、宮崎龍介との間に生まれ長男の香織さんは、終戦間近の昭和二十年（一九四五）八月十一日に、学徒出陣先の鹿屋空軍基地（鹿児島県）で戦死しました。その嘆きの歌が『地平線』の柱になっておりますが、白蓮の代表歌集と言ってもよいすぐれた歌集です。また戦後の白蓮は、そうした悲しみをバネにして、日本各地で平和運動を展開し、その旅先で詠まれた歌が『地平線』のもう一つの柱を形成しています。こうしたことは無論私も承知していましたが、実際に各地で再発見された数々の色紙を目にすると、「事件」以後の活動を、伝記として明らかにしてこなかったことが、痛切な反省として浮かび上がって参りました。

「事件」が起きた大正十年、白蓮は三十六歳でした。その後現在の池袋にある宮崎家で龍介との生活を始めるのは三十八歳、亡くなったのが八十一歳ですから、「事件」を人生の折り返し点とすれば、後半生のほうが長いのです。そうすると、白蓮の伝記が、生涯の前半生で終了しているのはいかにも不自然ということになります。また歌人としても、平和活動家としても大きな足跡を残した白蓮の後半生は、決して「白蓮事件」のおまけの人生ではありません。本日はこうした白蓮の後半生について、資料を紐解きながらお話ししたいと思います。

■「母」としての白蓮

「池袋時代の白蓮」ということで、後半生の白蓮の著作物――歌集類や小説類、新聞や雑誌に掲載した記事を見ていきます。新聞や雑誌の記事に関しては、ここで紹介するのはごく一部で、実はたいへんな数にのぼっています。

「筑紫の女王」と謳われ、「大正三美人」の一人と讃えられた白蓮は、マスコミ注目の著名人でした。その彼女が起こした恋愛事件は、時の宰相原敬暗殺の記事を片隅に追いやるようなセンセーションを巻き起こしました。事件以後、こうした人気にあやかるように、執筆依頼が白蓮のもとには殺到し、白蓮もまたそれに応えていきます。そこには当然原稿料が派生しますが、それが一時期、宮崎家の経済の支柱になっていきます。滔天時代の借財が清算しきれず、夫の龍介は病気という状況下で、宮崎家の経済を支える大事な役割を白蓮が果たしたわけです。このことは、「柳原白蓮との半世紀」（『文藝春秋』一九六七年六月）で、龍介が証言しています。

池袋の宮崎家には、無産政党の社会民衆党の若者をはじめ、中国やインドからの留学生、また白蓮に憧れて自由廃業した娼妓たちなど、多い時には数十名の人たちが出入りしていたと言われて

います。白蓮の「世相批判日記」（『婦人サロン』連載）に拠れば、なんとそこでは「かあちゃん」と呼ばれており、宮崎家に集まる人々に愛され、頼りにされる存在でした。

白蓮は龍介との間に、香織と蕗苳の二人の子をもうけて、実際の「お母様」にもなりますが、その前半生は肉親の愛情に程遠いものでした。誕生直後に生母と引き離されて柳原本邸に引き取られ、間もなく華族の習慣に従って里子に出されます。さらにその後、親戚筋の北野小路家の養女となり、十五歳で北小路資武と結婚、男子をもうけます。これは最初から意に沿わない結婚で、五年後には家を出てしまいますが、子爵家の嫡男である男子は婚家に残さねばなりませんでした。その後、再び自分の意志とは無関係に、炭鉱王・伊藤伝右衛門に嫁ぎます。子どもはいないと聞かされていたのとは違って、伝右衛門には実の娘の他に、妹の子ども二人が既に養子に入っているなど、想定外の家族構成にたいへん苦しみました。このように孤独をかみしめて生きてきた白蓮は、宮崎家に入ってからはこれまでの寂しさを取り戻すかのように、母の愛を惜しみなく二人の子に注いでいきます。

歌集『紫の梅』（大正十四年）や『流転』（昭和三年）には、そうした母の愛情がこまやかに表現されています。

ああけふもうれしやかくて生きの身のわが踏みて立つ大地はめぐる

今更のやうにかたへに眠る子をひれふすごときおもひしてみる

母は好きと頬をよせくる幼子の小さき顔に日のてりはゆる

こうした歌とは対照的に、伝右衛門との結婚当初の歌は、次のようなものでした。

行くにあらず帰るにあらず居るにあらず生けるか我が身死せるか此の身

このような、絶望の淵にいるような歌が、最初の歌集である『踏絵』や第二歌集の『幻の花』の中心をなしていることと比べると、池袋での白蓮は、新生の喜びをかみしめています。愛情に満ちた生活が、白蓮と龍介を中心に池袋で繰り広げられました。

■悲母の絶唱と平和活動

ところが、こうした幸福な日々を悲劇が襲います。長男香織の戦死です。

昭和六年（一九三一）に起きた満州事変以降、戦時色が強まっていくなかで、白蓮は次のような歌を昭和十年（一九三五）六月の「輝ク」誌上に発表しています。

この地球一角に起こる戦争のとどろき思へ心は暗し

戦争へひた走る時代の動きを鋭く捉えた歌ですが、ここで予感された暗さは、我が子の戦死という最大の悲劇として実現してし

まいました。その悲しみを詠んだのが『地平線』の「悲母」に収められた絶唱です。その中から少し引用したいと思います。

英霊の生きてかへるがありといふ子の骨壷よ振れば音する

もしやまだ帰る吾子かと脱ぎすてのほころびなほす心うつろに

こうした身を引き裂くような悲しみの中から、やがて白蓮は立ち上がり、平和を訴えて日本全国をまわります。その折々に詠まれた歌もまた『地平線』に収められています。例として、北海道と山形での歌を挙げてみます。

亡き人もここにあるかと石狩の流れの水と旅のこころと
（北海道）

いにしへのゆかりの人は居らねども其の日に似たり今日も雪降る
（山形）

風景と重ねた人生の深い感慨が歌われていますが、最後に引用するのは、別府の伊藤家別荘跡での歌。飯塚の本邸の他に、福岡の別邸は〈あかがね御殿〉と呼ばれて、多くの文化人が訪れたことで有名ですが、伝右衛門が贅を尽くして造営した別荘も、後に〈別府あかがね御殿〉と呼ばれており、そこは龍介と初めて出会った思い出の場所でもありました。

再びは来じと思ひし窓に立ち庭の木立に秋の声きく

この歌にも、自分の来し方と現在の思いが重ねられています。

■世界平和連邦運動

戦後の白蓮が邁進した平和活動についてですが、いつ、どこを訪れたかを特定する場合、資料として参照したいのは、白蓮が池袋で主催し、現在も続いている歌誌『ことたま』です。おそらくそれを読めば日時を含めて詳細な事情がわかると思います。ところが、白蓮在世中の『ことたま』は、国会図書館、日本近代文学館など公共機関には数冊あるだけです。資料として『ことたま』をきちんと見ることは白蓮研究の課題の一つと思っています。

現在『ことたま』を自由に見ることはできませんが、当時の新聞記事をたどっていくと、各地で白蓮が熱狂的に迎えられている様子がわかるんですね。その例として『夕刊フクニチ』（福岡の新聞。現在廃刊）の昭和二十八年（一九五三）十月二十日付の記事を紹介します。昭和二十八年は、白蓮が伝右衛門のもとを出奔して以来、実に三十三年ぶりに福岡の地を踏んだ年にあたります。

白蓮は、福岡来訪を躊躇したと言われていますが、その敷居の高い場所になぜ来たのか。記事によりますと、「国際悲母の会」の支部会をつくるためであり、その支部会の開催にあたって「白蓮会長が講話し、戦死者の遺族、白蓮ファンの女性たち、一千名の聴衆が堂を埋めた」ということです。会場となった松源寺は濡れ衣伝説発祥の地として有名ですが、その本堂を千名の人々が埋

めたという記事からは、平和を祈る人々の思いが溢れていた戦後の空気が伝わってくるようです。さらに白蓮は、インタビュー記事を通して、「悲母の会」の始まりについても明らかにしています。

悲母の会の始まりは放送でした。内の前の川崎（代議士）さんの息子さんが放送局のアナウンサーで。その反響の大きさにびっくり〔中略〕また、若いときの英語の先生の古谷さんが、ガダルカナルで一人息子が戦死したアメリカのミセス・クロスビーさんを連れてきて、共鳴。そこから国際悲母の会になった。



つまり宮崎家のお向かいに住む川崎代議士の息子さんがNHKに勤めており、勧められてマイクの前で子どもを喪った苦しみと平和について話をしたのが「悲母の会」の始まりで、その話に感動した人たちによって、各地に会ができたと言っています。さらに一人息子を戦争で喪ったアメリカ婦人が加わり、かつての敵と味方、国境を越えた「国際悲母の会」へと発展していったのです。それはその後、さらに「世界平和連邦運動」へと接続していきます。

「世界平和連邦運動」とは、原爆が投下された長崎・広島の惨禍に衝撃を受けたアインシュタインやシュバイツァーが呼びかけ、日本では湯川秀樹や賀川豊彦たちがそれに賛同して、昭和二十二年（一九四七）につくられた世界的な平和組織です。白蓮は昭和二十六年（一九五一）に「国際悲母の会」を解散し、「連邦婦人部」の形でそれを再結成しました。

その後日本各地に続々と誕生した活動を記録した『世界連邦二十年史』（世界連邦建設同盟、昭和四十四年五月）に、白蓮の活動は次のように記されています。

初期に於いて婦人運動を盛り上げた第一功労者は宮崎白蓮である。北は北海道から南は九州まで、文字通り足跡を残さぬところはないというほど丹念に説いて歩いた。歌の弟子や、悲母の会の組織が各地にあることが強みだった。白蓮が最も活躍したのは、昭和29年から33年で、この間関西に、関東に続々と婦人運動がおこり、各地に組織が生まれたのであるが、白蓮はせっせとその種子をまいて歩いたのである。〔中略〕疲労が積もって緑内障にかかり、ついに失明するのであるが、まことに執念と言うべき、すざまじいものであった。

同書に記録された白蓮の活動の具体例によると、昭和三十一年（一九五六）の伊勢方面の講演会では、六月二十五日に伊勢、二十六日には台風を衝いて鳥羽へ移動、二十八日には阿児町と山田市で講演しています。また、同年十月一日からは大阪支部の斡旋に

よって市内七ヶ所で講演するなど、年齢を考えるとたいへんな強行軍であり、まさに「執念と言うべき、すさまじいもの」でした。

また同書巻末支部情報によると、白蓮は中野支部所属であり、豊島支部では、江戸川乱歩が筆頭役員に名を連ねています。こうした組織は東京のみならず、日本各地に誕生して、各支部ごとに万単位の署名活動も行われました。同時期、九州では三池争議が起こるなど、民主化闘争や労働運動も非常に盛んな時代でしたが、『世界連邦二十年史』という記念誌もまた、戦禍から立ち上がった人々が平和を求めて運動体を形成し、全国規模で取り組んだ時代の証言集でもあります。白蓮の戦後の活動も、愛息の死を核としたこうした平和運動と共にあったのです。そしてそれを支えたのが、白蓮の熱い〈母性〉であったということができましょう。

■日中友情の家の誕生とその後

この〈母性〉の問題を、昭和期の白蓮の中心的なイデオロギーと指摘して、その問題点を考察したのが、菅聡子さんの「柳原白蓮の〈昭和〉」（『お茶の水女子大学人文科学研究』五号、二〇〇九年三月）です。菅さんは戦時下の白蓮の母性表現について研究されましたが、これは白蓮の後半生に関わるほとんど唯一の論文です。菅さんがどのように白蓮の〈母性〉を捉えていたかをご紹介したいと思いますが、その前に、作成した略年譜をたどりながら、池袋の家の歴史を確認しておきたいと思います。

池袋の宮崎家の歴史――血筋の歴史ではなく建物の歴史は、大正三年（一九一四）に始まります。明治四十四年（一九一一）に辛亥革命が成功し、アジアで初めての共和国が生まれましたが、孫文や黄興といった革命の志士たちを支援した代表的な日本人の一人が宮崎滔天です。辛亥革命はその後、第二革命、第三革命と苦難の歴史をたどり、そこには列強の思惑が関わっていきますが、宮崎家の建物は、滔天の窮状を見かねた黄興が、友情の証しとして提供した千円をもとに、「府下高田村（現・東京都豊島区西池袋）」に、大正三年に建設され、黄興によって「滔園」と命名されました。

「白蓮事件」は大正十年十月二十日の白蓮の家出に始まり、十一月一日には正式に離婚が成立しています（たいへんなスピードですが、なぜこんなスピード離婚ができたのかについては、【資料一】としてまとめていますので、そちらをご参照ください）。

離婚当日宮崎家に入った白蓮は、滔天と初めて対面しましたが、間もなく軟禁状態に置かれたままで香織さんを産んでいます。初孫の誕生を非常に喜んだ滔天の、愛情に満ちた手紙が白蓮にひそかに届けられましたが、孫の顔を見ることなく大正十一年（一九二二）十二月六日、滔天は五三歳の波乱に満ちた生涯を終えました。日中の友情の家として誕生した池袋の家は、こうしてその第一世代である滔天の終焉を見届けたのです。

白蓮が再び宮崎家に入ったのは大正十二年九月の関東大震災直後。この日から、昭和四十二年（一九六七）に白蓮、四十六年（一九七一）に龍介が世を去るまでが、龍介・燁子（白蓮）夫妻が営む家の、第二世代の歴史ということになります。

この第二世代にも、日中友情の家の性格は引き継がれ、大正十四年（一九一五）、龍介は社会民衆党を結成、組織部長になります。昭和三年（一九三〇）、社会民衆党は「支那支援要求声明」を出し

て、危機的状況にあった中国国民党への支援を政府に要求しました。その年に実施された日本初の普通選挙には、龍介も立候補します。しかし選挙期間中に吐血して倒れ、白蓮の奮闘もむなしく、結果は落選でした。同年十二月に龍介は、中国革命の歴史と世界情勢を解析した『対支外交論』を出版して、この中で政府の外交を痛烈に批判しています。

こうした支那通としての龍介の能力が必要とされたのは、昭和十二年（一九三七）七月の盧溝橋事件をめぐる政府対応においてでした。首相の近衛文麿は戦局の拡大を防ぐために、蒋介石との仲介工作を龍介に託しますが、これは軍部が探知して失敗に終わります。この間に近衛自身が政策を戦争拡大へと転じてしまい、龍介は完全に梯子を外された格好になってしまいました。これ以後、日中友情の家の第二世代は、中国との関係をめぐって苦しい立場に立たされていくことになります。

■『塹壕の砂文字』をめぐって

昭和十三年の日中戦争の本格化により、『主婦之友』をはじめとする婦人雑誌も一斉に戦時色に染まっていき、「銃後」という言葉が合言葉のように雑誌に飛び交いはじめました。

白蓮もそれに呼応して、昭和十三年には『支那事変歌集　塹壕の砂文字』（以下、『塹壕の砂文字』と略記）を、また昭和十八年（一九四三）には『民族のともしび』という長編小説を発表していきます。菅聡子さんが白蓮の〈母性イデオロギー〉を問題にしたのは、主にこの二作品をめぐってのことでした。

『塹壕の砂文字』は、後にA級戦犯として裁かれた陸軍大臣（この当時は師団長）板垣征四郎の夫人、板垣喜久子の歌十首を巻頭に、兵士、傷病者軍人、従軍看護婦たち五十八名の歌を集めた「塹壕編」と、銃後を守る国民の歌「銃後編」を収録したものです。白蓮は跋文に、「太閤がこころざしたてて幾百年進軍喇叭唐の野に鳴る」以下十首に続いて、「東洋平和、亜細亜民族の福利のため、全ての労苦に堪えていかねばならない」と、戦時下の覚悟を記しています。

それを読んで感激した生田花世は、「柳原白蓮女子の編された『塹壕の砂文字』に公表された数百首のうちから、私は、自分の心を鼓舞するために抜粋した十数首を次々に記して、朗唱した。」と述べて、「かぎろひの燃ゆる三伏もゆる魂一気に焼かん四百豫州を（中村公一）――出征の時の心だ。勇士はかううたつて北支に行った」（「軍人歌の精神」、『銃後純情』一九四〇年）等々の勇ましい歌を抜粋していますが、こうした熱に浮かされた感想を読むと、戦争イデオロギーのプロパガンダとして『塹壕の砂文字』が機能していたことがわかる気がします。

■『民族のともしび』と〈母性イデオロギー〉

管聡子さんは、歌集の果たした役割に触れて、「滔天・龍介の系譜にあり、自身も日中友好をことある毎に謳いながら〈支那事変歌集〉を編纂する行為自体には怪訝な思いを抱かざるを得ない」という疑義を呈して、「東洋平和」とか「亜細亜民族の福利」と言った言葉のセンチメンタリズムそのものが、女性を戦争協力へと駆り立てていくのだと指摘しています。それに続いて、母性が含み持つセンチメンタリズムが，ファシズム化してゆく例として

あげているのが『民族のともしび』です。

管さんはこの小説を、「〈母〉を結節点とした〈血の物語〉」と定義し、そこに、「日本対中国を文明と野蛮の二分法に基づく帝国の視線」、「戦死した我が子を、自らの名誉とする典型的な〈母性フアシズム〉の構図」、「大東亜共栄圏が母性とともにあること」等を指摘して、以下のように結論します。

> 『民族のともしび』は素朴な母子の愛情がどのように母性フアシズムへと変貌して、戦時下の人々を支配したかの典型的作品である。

〈母性〉が政治的な力として機能するという指摘は、一九八〇年代以降の女性学の深まりの中から生まれました。管さんの論文も、「戦争における女の加害責任」を追及した女性学の成果として位置付けることが出来ると思います。

『民族のともしび』は入手がとても困難な作品ですが、平成十七年（二〇〇五）に、ゆまに書房から菅さんの解説付きで復刻されています。それを読みますと、戦死する青年がいかに母を愛していたか（本文引用「僕の為には神の位に近いものはお母様です。世界で一番偉い、一番崇高なお母様！」）、そして最愛の我が子を失ったその母が、いかにして悲しみを悠久の大義に昇華して耐えていくか（本文引用「崇や！お前よく死んでおくれた。東洋平和のため東洋民族の福利のために、今にお前のおかげで美しい人間の仕合せな世の中が来るのだよ」）、読んでいて息が苦しくなる思いがします。こうした言説をたどっていくと、菅さんの「母性ファシズム」という指摘も、もっともだと思わされます。

> 「私共はものの清浄を、そして汚れという事をやかましく言われて育てられています（支那人は下等な人間だからこれがわからないのだわ）〔中略〕貴方のお国は、お気の毒ですが劣等国です。私があなたと結婚してあげたのは、貴方としては光栄だろうと思っていました。私は天下り女房のつもりでいました」

これは、吉村佐喜子という登場人物の言葉です。佐喜子は、留学生の馬秋帆と結婚して上海に行き、そこで順と達という二人の男の子を産みますが、夫が中国の風習に従って第二夫人を迎えたことに失望して、順だけを連れて帰国します。その時の佐喜子の言葉です。まさに「日本対中国を文明と野蛮の二分法に基づく帝国の視線」が露呈している箇所と言えましょう。

佐喜子の長男の順も中国に出征して負傷しますが、数奇なめぐりあわせで、実弟の達に救出されます。しかしそのことを恥じた順は、結局割腹して死んでしまうのですが、その死を悼んで次のような言葉が彼に手向けられ、それがそのまま小説の結びとなっています。

> 「達の言うには兄は日支両国の楔となって生まれ、散華したのだ。日本の古武士の作法を以て自決した。骨は父のもの、血は母のもの。しかして日本魂は大東亜の上に、護国の鬼となって限りなき命によみがえったのだ」

■『民族のともしび』にみる中国観

管さんの指摘に従うように『民族のともしび』の骨格をご紹介しましたが、それだけで語り尽くせないもの、つまりこの小説のユニークな面白さも、やはり指摘しておきたいと思います。なんといってもユニークな点は、主人公の崇と順という青年が、二人とも中国人の血を引いているという人物設定ではないでしょうか（登場人物の相関関係については【資料二】をご参照ください）。

崇は、中国政府によって銃殺された陳振東とその妻の間に生まれた中国人の子です。死の間際に、陳振東から崇を託されたのが南方順一であり、順一の妻の州子の深い愛情の中で、崇は日本人として成長します。

義父、南方順一は、中国を支援する豪傑肌の志士で、滔天の面影を彷彿とさせます。しかし南方は、日本と中国が合体して新しい秩序をつくるべきであるという「日支合体説」を唱えており、その点では、戦時下で「南進論」を唱えた龍介の面影も反映しているのかもしれません。

もう一人の青年、順についてですが、彼の父親は、すでにお話しましたように、馬秋帆という中国人です。このように中国に出征してゆく主人公の青年二人がそろって中国人の血を引いていること、これは戦時中の他の小説には見られないユニークな設定と言っていいのではないでしょうか。この点から小説を読んでゆくと、母親が注ぎ込む熱烈な〈母性〉という側面以外に、別のテーマがそこには存在しているように思われるのです。

『民族のともしび』には、中国の血を引く青年の物語として、日中を「兄弟の国」と表現する箇所が何度もあります。アメリカやイギリスに対する敵意をストレートに表現するのとは対照的に、中国に対しては「兄弟の国」として、友愛の気持ちが描かれていきます。そうした「兄弟の国」に、その国の血を引く青年が出征するのですから、そこには大きな苦悩が生じるのです。次の本文をご覧下さい。崇はその苦悩を、次のように語っています。

「此度の出征が、幸い米英を打つのなら仕合せこの上もないが、もし僕が支那人の血であつたとして、我血の祖国の支那人を仇とねらふ、一体之はどうなるんだい」

次に日中に別れて住む双子の母親である佐喜子の言葉も見てみましょう。

「洲子さん、誰も聞いてる人がいないから言うけど、同じ腹から出た兄弟が互いに敵味方になって戦争する―そう考えたら全く辛いのよ。」

こうした苦悩の言葉とともに、見過ごすことができないと思うのが、昭和十二年（一九三七）十二月の南京攻略について言及される場面です。歴史上「南京虐殺」とも言われた戦闘に関する記述です。

「私時々思い出しますのよ、いつか南京入城のあったとき、支那の若い少年たちがだいぶ戦死したという事を聞いて――ねえ、洲子さん、あの時支那軍、日本の敵の方の子を、かり

そめにも不憫をかけたりして、私非国民かしら」

この箇所は、昭和十八年発表当時の小説としては、踏み込んで書いていると思います。こうした箇所にも、菅さんが指摘された論点以外の要素を感じ取ることが出来ます。その最大なものが中国に対する抜きがたい親愛の情であり、その国と戦う苦悩が繰り返し表現されていることだと思います。

しかしながら、そうした兄弟国を相手に、なぜ我が子の血まで流して戦うのかという苦悩への解答が、小説上で示されてはいません。母たちは祈るように、「もっと年月がたってすべてが清まると思うわ。会津戦争の人もその時は朝敵だったけど、今となっては朝敵なるがゆえにあの人たちの忠義が打ち消されはしないぢゃありませか」、あるいは「明治の御維新に日本国中が一つに納まったように、支那と日本が一つに治まったらどんなにいいでしょう〔中略〕同じ東洋人だから顔だけでは欧米人の様に区別つきませんもの。」と、未来を夢見る他はないのです。

「東洋平和のため、東洋民族の福利のために死ぬ」という小説の結論は、苦悩を論理で解決できないために生じた矛盾の表れに他なりません。この矛盾のために、『民族のともしび』は、せっかくのユニークな人物設定を、十分に展開できずに終わっているのです。

しかしながら、このような論理の矛盾やねじれが白蓮一人のものではなかったことにも注意を払う必要があると思います。それは決して龍介の思想について白蓮が無理解だったからではなく、むしろ龍介を含めた多くの知識人・言論人に共通した言説を、白蓮が踏襲していることを押さえておく必要があります。

■無産政党の動き

有馬学氏は『帝国の昭和』（講談社、二〇〇二年）の中で、日中戦争の「わかりにくさ」について以下のように述べています。

〈支那事変＝日中戦争〉のわかりにくさは、それが〈言葉〉を介して行われる、イデオロギーの戦争だったからである。

近衛文麿は昭和十三年の声明において、「東亜新秩序」をスローガンに掲げて、「支那事変は東洋平和を回復し、善隣友好、経済提携を具現するものであり、帝国主義的な国家間の戦争とは違う」と主張しています。戦争遂行の論理として、実にわかりにくく、斉藤隆夫が有名な「反軍演説」（昭和十五年二月）で、「近衛声明は意味不明で、雲をつかむようなもの」と痛烈に批判しました。それにもかかわらず近衛ブレーンの三木清や蝋山正道は、「アジアから欧米の植民地を追い出し、資本主義の是正を行うためには、『東亜共同体』が必要なのだ」と主張したのでした。

しかし、近衛の「東亜新秩序」だとか、三木や蝋山の「共同体論」が、なぜ主張されるようになるのか、有馬氏は、次の問題を挙げております。

こうした根底に日本資本主義の後進性、その集約点として〈農村の遅れた姿〉というイメージが知識人に共有化されており、こうした特殊論は後進性からの脱却願望によって、一定

の条件下でナショナリズムに転化する。

要するに、農村の貧しさに象徴される、遅れた日本の資本主義から脱却するためには、ナショナリズムを通して、長期的戦時体制を構築していく以外ないと、多くの日本人が考えていったのです。また、産業を重化学工業中心に組み替えてゆく必要が、官民一致で叫ばれました（今やストッキングなどを細々と輸出している場合ではないということです）。そのためにも中国における利権が肯定されるという大きな流れを、有馬氏は指摘しています。

左翼陣営にも動揺が走ります。龍介の「社会民衆党」は分裂し、盟友の赤松克麿は、日本の〈生存権〉のために、満州国の利権を肯定していきます。赤松の妻の明子は、吉野作造の娘さんですが、赤松夫妻はそろって「満蒙利権を労働者、あるいは搾取のない国家が護る」ことを条件に肯定に転じました。

その後、昭和七年（一九三二）になって、「社会大衆党（戦後の社会党の前身）」として統一戦線が組まれますが、労農派の麻生久は軍部ファシズムに接近し、「戦争は一種の革命である」とさえ認識されていったのです。共産党はすでに壊滅状態で、いくら運動しても地主制度はなくならない――当時、小作権は、法的な権利でもありませんでした。そうした閉塞感の中で、満州の利権を肯定してゆく方向に舵が切られたのでした。

国会議員の中野正剛も、「東方会」という組織をつくり、満州権益を「国民・大衆の新しい正義である」と主張します。「東方会」の会員二十数名が中国を訪問した昭和二十年三月、宮崎龍介も「東方会」に正式加入し、東京府連合会の会長になります。中野正剛の「東方会」は「南アジア諸民族の開放」という大義名分のもとに「南進論」――日本軍の南への進軍を主張します。龍介もそれに賛同する「南鵬会」を立ち上げました。

先ほど『民族のともしび』には、苦悩と論理の飛躍が含まれていると申しましたが、それはまさしく「東亜新秩序・東亜共同体」というイデオロギーが内包するものに他なりません。その矛盾とわかりにくさは、戦争総力体制への賛同と、抵抗という両義性が生み出したものでもあります。『民族のともしび』は、そうした時代の検証から再検討の必要があると思われます。

■ユニークな歌集『塹壕の砂文字』

『塹壕の砂文字』についても少しだけ補足させていただきます。その編集方針を白蓮は、「あとがき」の中で、「編集の特徴は有名歌人中心でなく、新聞を通じて募集し、朝日、日日、読売、都、福岡日日、九州日報等の各新聞、及び朝鮮行政、報国の投稿歌から選んだ。」と書いていますが、その結果どのような歌が選ばれたのか。

なかには、生田花世が感動した軍人精神高揚の歌もありますが、そればかりではないのです。

両手併せ我をおがみ生命乞ふ俘虜の肩より血はにじみたり
（横山部隊　穂積肇）

この歌には続きがあって、この怪我した捕虜を手当てして、命を取り留めたことを喜ぶ歌が後に続くんですね。それから、次の

ような歌もあります。

赤土のはろぐしき曠野行く汽車の窓に読む内地の新聞
（中山部隊　露木公一）

クリークの寒月ゆるるところにしていま着きし兵米を磨ぐなり
（千葉真一郎）

新しき戦友来たり敬礼す直ちに問ひぬ郷里の田植えを
（陸軍病院　石田三次）

三日三晩食無し我は見いだせる芋をかじりぬ十五ばかりも
（池田部隊　安蘇光）

このような、戦地での日常を詠み、また飾らない実感がこめられた歌が収められることは、案外少ないのです。その意味ではユニークな歌集だと言えます。

『塹壕の砂文字』と同じ年に出版された小説に、火野葦平の『麦と兵隊』がありますが、次のように評価されています。

大熊信行の評価（「火野の文学は、戦争なるものの日常的性格をゑがいたことによって、われわれ日本人を撃った。戦争と言うものも、歩くことであり云々）は、戦争と言う非日常行為を、日常性においてとらえることによって達成されたリアリティーへの評価である。戦争における英雄的行為や犠牲的精神、あるいは残虐性などで構成するドラマではなく、兵隊の日常を価値化する視点が特徴的である。（有馬学「戦時期日本の文化・運動・地方」、『九州の思想』花書院、二〇〇七年）

有馬氏は、日中戦争という総力戦の語り方の決定的変化がこの『麦と兵隊』にあるのだと指摘しているのです。たとえば、昭和六年（一九三一）の満州事変の際には、「肉弾三勇士」という英雄が大宣伝されました。日露戦争における広瀬武夫の殉職など、英雄的な事柄を語ることが戦争を語ることであったわけです。

しかし、戦場の兵士たちの日常性の語り方という新しさで、『麦と兵隊』は評価されています。これを『塹壕の砂文字』にあてはめれば、数少ないとはいえ、その当時拾われることのなかった無名の兵士たちの歌が採取されている点は注目に値します。

泥沼の中に疲れて動かざる馬を打つ我何故か涙す

親もあり妻あり子あるこのわれの片足なくば生きていけじと

などの、反戦歌すれすれの歌も採録されており、一概に戦争プロパガンダ歌集と切り捨てることができないことを、付け加えておきたいと思います。

■おわりに

戦争の時代を生きるとき、生命に関わる選択を強いられる中で、ある時は加害者であり、またあるときは被害者でもあるという両

極を、人は生きていかざるを得ないように思われます。戦後そのことにいちばん愕然としたのは、愛息の死に直面した白蓮ではなかったでしょうか。「一生懸命生きてきた結果のこの悲惨は何なのだ」という問いかけの中に、白蓮の戦後の動き――身を呈しての平和活動のエネルギーがあったと思われてなりません。白蓮の戦中、戦後の作品群は、そうしたことを含めて、今後の研究がなされていくべきだと思います。

白蓮は「筑紫の女王」と謳われた華やかな炭鉱王の妻の座から一転して、労働者や生活者とともに、そしてなによりも家族とともに、池袋の家でその半生を生き抜きました。時代に翻弄され、また多忙をきわめる中で、最終的に『地平線』で達成された表現の深みには、生涯をかけて表現を手放さなかった人間の強さ、深さを見ることが出来ます。

「白蓮事件」以後、時代のただなかで生き抜いたその後半生については、最初に申しましたように、十分に明らかではありません。この後半生の掘り起しは、アジアと深くつながった宮崎家の歴史を背景に考えていく必要があると思います。〈池袋学〉としての白蓮研究の可能性の豊かさも、そこにあると考えております。

【資料一】

白蓮事件当時、筑豊だけでなく日本全国の企業でストライキが頻発しており、筑豊、三池の大手炭鉱は軍隊を使うなどの非常手段でそれらを鎮圧している最中でした。伊藤家からの白蓮出奔に際しては、龍介が所属していた東大新人会メンバーが連携して支援していましたが、その一人であった赤松克磨の当時の肩書は「炭鉱総同盟理事」です。炭鉱における労働争議の中心人物の一人であったわけです。炭鉱側はこれを警戒し、「事件」を口実に彼らが介入することを恐れました。大正天皇のいとこでもある白蓮の離婚問題は華族制度を揺るがす政治問題でもありましたが、炭鉱経営者側からも重大な危機管理が要請される事件だったわけです。柳原家と伊藤家の離婚問題に、麻生、貝島といった〈筑豊御三家〉と呼ばれた炭鉱主の面々が立ち会って早期決着が図られ、スピード離婚が成立した背景には、こうした背景があったと思われます。

『大阪朝日新聞』（大正十〈一九二一〉年十月二十二日発行〈二十三日付〉夕刊）に掲載された白蓮の絶縁状には、男性の文体が随所に表れています。白蓮が書いた離縁状の原文を、赤松たちが、世論や社会正義に訴える女性の人権宣言として再構成し、それが新聞に掲載されたとみられます。

「事件」を報じた記事の中で、「同棲十年の夫を捨てた、白蓮女史」、「日本のノラがついに家出した」といった見出しが躍りましたが、白蓮の行動の背後には、家出したくともできなかった日本のノラたちが大勢いたことになります。女流俳人杉田久女は、「日本のノラ白蓮」が巻き起こした「事件」を羨望しながら、実行できないわが身を「足袋つぐやノラともなれず教師妻」（『ホトトギス』大正十一年二月）という一句に込めています。

【資料二】

『民族のともしび』の主な登場人物

南方順一（故人。中国の革命の志士を支援した熱血漢）

〃――崇（二四歳。中国に出征して戦死。かつて銃殺処刑された中国人、陳振東の忘れ形見）

南方洲子（血のつながらない崇に母性のありったけを注ぐ）

吉村隆吉（私大教授。佐喜子と再婚）

〃――順（二六歳。中国出征中怪我をして実弟の建に救出されるが、割腹自殺する。実父は馬秋帆）

吉村佐喜子（馬秋帆との間に順・達の双生児を儲けるが、離婚。帰国後吉村隆吉と再婚）

〃――順（佐喜子と帰国）　達（順の双生児。中国に残る）

馬秋帆（日本に留学した秀才。佐喜子と離婚後、中華民国政府の要人に出世している）

（いのうえようこ　福岡県人権啓発情報センター館長、福岡国際大学名誉教授）